

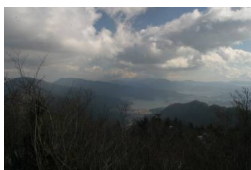
## 仙人通信 98 節刀ヶ岳(1736m)

節刀ヶ岳は西湖の北・御坂山塊の中央に位置し、山梨 100 名山の 61 番目の山である。河口湖の大石地区から芦川村に抜ける道路が完成したお陰で、林道へは新道のトンネルの入り口左から沢にそって 200m 程進んだ所が、大石峠への登り口である。ここに車を置き、大石峠から尾根伝いに節刀ヶ岳を往復するコースを計画した。

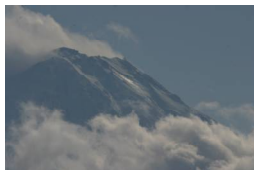
大石峠は、嘗て御坂峠と同様に国府が置かれた甲府と富士吉田を結ぶ重要な古道であった。大石峠入り口を示す大きな看板に従い、舗装された林道を 100m ほど進み、大きく左にターンした先に登山道を示す小さな道標がある。沢を右手に見ての杉・檜の暗い林の登りが始まる。登山道に入り 15 分程・堰堤を 3 個過ぎた所に木片に手彫りで左側が大石峠・右側が山道(?) とある。沢筋から離れて九十九折れの登りが始まる。1000 年以上も頻りに利用された古道であったこともあり、岩は両側に除かれて整備された道は、草鞋でも無理なく通過出来た事が伺える。時代毎の旅姿を想像するのも楽しい。そんな時だ一抱えもある岩が転がって居るではないか。まさかと思い起して表面のスギゴケを採り除くと「馬頭観世音菩薩」とある。近くの平な場所に安置し、今日の無事を祈った。登山道に入って 45 分程であろうか、落葉樹が杉・檜に混ざり、暗い道から日の光が差し込んできた。小鳥も鳴き、やっと山に来た気分だ。日の光が米粒程の紅い実を透かし、ルビーの様だ。手にとり見ると黄色い 3 枚の顎に守られているようだ。カーブの先に僅かに滴り落ちる程の水場で、このコース最後の水場である。近づくとそこには最近のものと思われる日本カモシカの糞があった。昨年の 2 月鬼ヶ岳に登った折、出会った雌の鹿の事が脳裡を過ぎた。やがて西湖が毛無山越しに見え、歩き始めてから 80 分で薄や枯れた薊の大石峠に辿り付く。三つ峠・道志の山・三国峠・萱の原の富士山麓・群青色の河口湖・山中湖が一望できる。残念ながら富士山・秩父連山は雲で見る事が出来ない。峠からは、昨日降った雪に薄化粧した尾根路だ。カラマツ等の落葉樹の尾根路は、青空の下で明るく快適だが、尾根の南側はツガ等の常緑樹に覆われ視界を遮る状態が続く。背の低い躑躅の枝や腰丈の笹が登山道を覆い、行き先を拒む。訪れる人の少なさを教えてくれているようだ。峠から 3 個目のピークである金堀山でやっと南側が開けて、富士山の山頂が顔を出し始めた。梢越しではあるが、雪に化粧した節刀ヶ岳や十二ヶ岳も望めるようになった。右後方には黒岳・釈迦ヶ岳も望める。峠から 1 時間金山との分岐である。1cm 程度に積った雪には足跡もなく、一人でこの峰に居られるのも嬉しい。10 分程で三等三角点の節刀ヶ岳の小さな山頂だ。雲に覆われた富士山は強風に煽られて時折十二ヶ岳の先に顔を出す。雲が飛び・雪も粉塵となって舞い上がっている様子が伺える。相模川に沿って出来た愛川 藤の木断層が、笹子から清八峠・御坂の藤の木、そして黒岳と釈迦ヶ岳の間を抜け芦川へと繋がることを、この山頂からの俯瞰図として確かめられるのも最高である。南アルプスは残念ながら雲の中であるが、前衛の源氏山(巨摩山地)までは確認できる。先に登った鬼ヶ岳もすぐ下である。時折西に向う飛行機が青空に機体を光らせて上空を過ぎるのを、ノンビリと眺めるのもいいものだ・・・。

登って来たコースを戻った約 5 時間(21000 歩)の山路でした。(h 2 2・1 2・2 4)

大石峠からの山中湖



富士山頂



金堀山と節刀ヶ岳

